馬耳東風

平成８年に農水省家畜衛生試験場東北支場が廃止され総合診断研究部の隔地研究室となった時，「東北支場66年のあゆみ」という記念誌を作ることになった．その際，創立当時の世情をしりたいと思い「七戸町史」に目を通していたら，当時（昭和５～６年）は，のちに昭和農業恐慌といわれるほど農業が打撃を受けた時代であり，中でも，東北地方の被害は深刻であったと記されていた．わずかの金を求めて青田売りが横行し，児童の欠食や女子の身売りが深刻な問題となったという記載とともに，当時雑誌に掲載された東北地方のルポルタージュの一節が引用されていた．「このルポルタージュの全文を読みたい」と思ったが，昭和初期の一般の雑誌ということで国会図書館へでも行かなければ読めないだろうとあきらめかけた．しかし出版元ならあるかもしれないと考え，C社へ電話してみた．すると「確かにありますが，ガラスの陳列ケースに収まっており大変貴重なものですから，取出してコピーなんてとんでもありません．」と断られてしまった．本は読むために作られるのであり，飾っておくために作るものではないはずだがなあと思ったがどうにもならない．その直後，農業総合研究所（現在の農林水産政策研究所）の図書室にあるということがわかりコピーを依頼したらあっという間に郵送されてきた．大変うれしかったが，それと同時に出版元とのあまりの落差に驚き，私が若い頃流行語のようになっていたレーゾン・デートル（存在理由）という言葉が頭をよぎった．農総研の図書室はしっかり自己の存在理由を示したのに対して，C社はそれを見失っていると思ったのである．数年後この出版社は経営危機に陥り，倒産は免れたが他社の資本が入ることになったというニュースに接した．ああヤッパリ，存在理由を失った会社が存在する理由はないわなと思ったが，そのことをここで云々するつもりは全くない．その後日譚を書きたいのである．

つい最近，またそのルポルタージュを読み返す必要に迫られ，コピーを捜したが見つからない．ヒットするわけないと思いつつ試しにGoogleで検索したら，何と出てきたのである．「飢餓地帯を歩く ―東北農村惨状報告書―　下村千秋」．もとの雑誌の記事がネットにアップされたのではなく，その全文が家の光協会発行の「土とふるさとの文学全集7」―1976（昭和51）年7月20日発行―に収められており，この本がネットで読めるようになっていたのである．文末に，「2012年3月26日作成青空文庫作成ファイル：このファイルは，インターネットの図書館，青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました．入力，校正，制作にあたったのは，ボランティアの皆さんです．」とあり，入力者と校正者の名前が書かれていた．Googleが全国の図書館の本をインターネットで読めるようにする計画を持っているというニュースを読んだ記憶があるが，実際ここまで進んでいるとは思いもかけなかった．私が農総研の図書室でコピーしてもらったのが1996年だったので，それから17年でここまで変化！したのである．学術雑誌の検索がネットでできるようになった時も隔世の感を抱いたものだが，学術雑誌ということで素直にその進歩を喜んだ．しかし一般書，それも決して広く読まれるとは考えられないジャンルの本まで簡単にネットで読めてしまうという時代をどう考えればいいのであろうか．われわれ一般人は単にその便利さを享受すればいいのだろうか．社会科学や文学関係の研究に携わる人たちはどのような影響を受けているのだろうか．その研究方法も随分様変わりしているのであろうか．と，さまざまなことを考えさせてくれた，私にとっては「大事件」であった．

（久）